

# カリキュラム開発研究 研究構想図

東京都教職員研修センター研修部教育開発課  
都立東久留米総合高等学校 主任教諭 西塚 翔平

<p><b>【社会背景】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>言語活動を通して、英語によるコミュニケーション能力を高めることが求められている。 (高等学校学習指導要領 [平成30年告示])</li> </ul> <p><b>【今日的な教育課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グローバル社会における人材育成 (第4期教育振興基本計画)</li> <li>主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 (高等学校学習指導要領 [平成30年告示])</li> <li>主体的に学び続ける態度と総合的な英語力の育成 (令和6年度東京都英語教育改善プラン)</li> <li>生成A Iの活用促進 (東京都教育施策大綱・令和7年3月)</li> </ul>	<p><b>【東京都教育委員会の教育目標】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>互いの人格を尊重し、思いやりと規範意識のある人間</li> <li>社会の一員として、社会に貢献しようとする人間</li> <li>自ら学び考え行動する、個性と創造力豊かな人間</li> </ul> <p><b>【東京都教育ビジョン (第5次)】</b></p> <p><b>【柱1】</b> 自ら未来を切り拓く力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の推進</li> <li>「使える英語力」を駆使し、自分の意見を伝え議論することで新たな考えを生み出し、国内外の課題を解決していく力を伸ばすための取組を強化</li> </ul> <p><b>【東京グローバル人材育成指針 (令和4年3月)】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>TARGET 2 行動指標の例 「様々な視点から自分の考えを検討し、根拠等を吟味し、主張を明確にすることができる。」</li> </ul>	<p><b>【教科等の課題】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>東京都教育委員会「東京都立高等学校入学選抜検査結果に関する調査 報告書」 「書くこと」の問題 (大問2・3 (2)) 令和3～7年度の平均正答率 48.4% 検査問題全体の平均正答率 61.7%</li> </ul> <p><b>【所属校の実態】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業における生徒の言語活動の時間が不足している傾向にある。</li> <li>習熟度別授業を実施しているため、指導内容や評価方法について、担当者間での調整が不可欠である。</li> <li>パフォーマンステストの評価を担当者間で調整している。</li> </ul>
--	--	---

<p><b>【育てたい児童・生徒像】</b></p> <p>自らの伝えたいことを論理性に注意して英語で表現するために、主体的に学びを進める生徒</p>
---

<p><b>【先行研究】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>東京都教育委員会 (2023) 「令和4年度 教育研究員研究報告書 中・高 合同・外国語」 研究主題：一人1台端末の活用を通して対話的な学びの機会を設定し「書くこと」の力を育成する指導の工夫 必要に応じて端末を活用させ、多くの生徒の学習意欲を底上げした。また、英作文演習用のルーブリックを事前に提示し、目標を明確化して作業に取り組みさせた結果、多くの生徒がまとまった英文を書くことができるようになった。</li> <li>山岡大基 (2020) 「高校英語「書くこと」における帰納的プロセスを用いた論理構成の指導」 最終的に生徒が書くべき文章は演繹的な論理展開をもつものであるが、その前段階にある帰納的な思考を焦点化することで、生徒の作文を支援した。結果、読み手本位の論理的に首尾一貫した、あるいは少なくとも、それを志向した文章が多くなった。</li> <li>吉田信介 (2025) 「生成A I活用による「気づき」を重視したライティング指導」 生成A Iのアウトプットを最大限に活かすには、入力 (プロンプト) の具体性と明確さが不可欠である。 生成A Iが見落とす部分や微妙なニュアンスを補うため、人間側の再確認と最終調整は欠かせない。</li> </ul>
--

<p><b>【研究主題】</b></p> <p>「自らの考えを論理性に注意して書いて表現するために、主体的に学びを進める生徒の育成—高等学校・外国語 (英語) 科における生成A Iを活用した学習モデルの開発を通して—」</p>
---

<p><b>【主題設定の理由】</b></p> <p>社会状況と今日的な教育課題について、「令和6年度東京都英語教育改善プラン」では、高等学校の目標は、「主体的に学び続ける態度と総合的な英語力の育成」とされている。グローバル化が進行する社会を生きていく生徒の育成においては、主体的に学びを進め、英語を用いて、積極的にコミュニケーションをとろうとする態度を身に付けさせることが必要である。</p> <p>論理性と「書くこと」の関連について、「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編」において、論理性に注意することは、「できる限り論理の矛盾や飛躍がないよう、理由や根拠を明らかにするなどして、論理の一貫性に注意すること」とされている。そこで本研究では、自分の意見や主張などを適切な理由や根拠の示し方に注意をしながら、読み手に分かりやすい構成や展開に注意して「書くこと」を「論理性に注意して書くこと」とした。</p> <p><b>【副主題設定の理由】</b></p> <p>「書くこと」の指導に際しては、生徒の状況に応じて、個に応じた指導を充実させる必要がある。この際、補助的に生成A Iを活用することで、個別最適な学びにつながり、学習意欲も高まっていくと考えた。また、生徒が生成A Iを活用して英作文を推こうする学習過程を学習モデルとしてまとめることで、他の教員への普及も行えると考えた。</p>
---

<p><b>【研究仮説】</b></p> <p>「書くこと」の言語活動の中で、生成A Iを活用して、推こうを繰り返すことで、生徒は、主体的に学習の調整を行い、読み手に伝わるように、自らの考えを論理性に注意して英語で書いて表現しようとする意欲を高めることができるだろう。</p>
--

	目的	資料・方法 (実施予定月)
基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>言語活動の理解</li> <li>学習評価の理解</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文献調査 (学習指導要領ほか) (4～6月)</li> </ul>
調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>言語活動の実施状況及び生成A Iの活用状況の実態把握</li> <li>研究対象校の実態把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>都立高校・外国語 (英語) 科教員へのアンケート (7月)</li> <li>研究対象校の授業見学 (6～7月)</li> </ul>
開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習モデルの開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習指導案の作成 (7～9月)</li> <li>教材の開発 (7～9月)</li> </ul>
検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習モデルの効果検証</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>検証授業の実施 (10～11月)</li> <li>検証授業のまとめ (11～1月)</li> <li>学習指導及び評価モデルプランの作成 (12～1月)</li> </ul>

# 研究主題「自らの考えを論理性に注意して書いて表現するために、主体的に 学びを進める生徒の育成－高等学校・外国語（英語）科における 生成A Iを活用した学習モデルの開発を通して－」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課  
都立東久留米総合高等学校 主任教諭 西塚 翔平

## 第1 研究のねらい

「高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）」（以下「高等学校学習指導要領」という。）において、外国語科の目標は、言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することである。「高等学校学習指導要領解説外国語編 英語編（平成30年7月）」（以下「高等学校学習指導要領解説」という。）では、改訂の趣旨として、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動が適切に行われていないことが課題と記されている。また、「東京都教育ビジョン（第5次）」、基本的な方針3「グローバルに活躍する人材を育成する教育」、強化のポイントでは、「使える英語力」を駆使し、国内外の課題を解決する力を伸ばすための取組を強化することが示されている。さらに、東京都立高等学校入学者選抜検査問題・英語における「書くこと」の問題では、まとまりのある文章を書き、英語によるコミュニケーションを通して身近な課題を解決する能力や自分の考えを英語で表現する能力を測定している。「東京都立高等学校入学者選抜結果に関する調査報告書」によると、同問題の令和3～7年度の平均得点率は、48.4%であり、英語の検査問題全体の平均得点率61.7%を下回っている。このため、生徒の学習状況の実態を把握し、高等学校段階においても、「書くこと」の指導を充実させていく必要がある。

「書くこと」の指導では、生徒の書く力に応じた教員による個別指導が不可欠だが、学級単位の授業では限界がある。この状況を改善するために、生成A Iを活用できると考えた。生成A Iは、利用者のニーズに応じた結果を出力することができるため、生徒は、自ら考えながら英作文を推敲する場面において、教員による個別指導を補うことができる。

この状況を受け、本研究では、自らの伝えたいことを論理性に注意して表現するために、主体的に学びを進める生徒の育成を目指すこととした。

## 第2 研究仮説

「書くこと」の言語活動の中で、生成A Iを活用して推敲を繰り返すことで、生徒は、主体的に学習の調整を行い、読み手に伝わるように自らの考えを論理性に注意して書いて表現しようとする意欲を高めることができるだろう。

## 第3 研究の内容と方法

### 1 基礎研究

#### (1) 「書くこと」の指導における「論理性」の定義

高等学校学習指導要領において、「論理性」は、高等学校・外国語科の各科目、「書くこと」の指導目標におけるキーワードである。高等学校学習指導要領解説において、論理性に注意するとは、「できる限り論理の矛盾や飛躍がないよう、理由や根拠を明らかにするなどして、論理の一貫性に注意すること」と定義されている。本研究においても、この定義に準じることとした。

## (2) 主体的に学習に取り組む態度の評価

国立教育政策研究所「学習評価の在り方ハンドブック 高等学校編」によると、「主体的に学習に取り組む態度」は、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で評価を行う必要がある。具体的な評価方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、生徒による自己評価や相互評価等の状況が示されている。これらを受け、生徒がワークシート等に学習過程を記録し、教員は、これを参考にしながら、実際の学習状況を確認することで、「主体的に学習に取り組む態度」を評価できると考えた。

## 2 調査研究

「書くこと」の指導実態及び生成AIの活用状況を把握するために、都立高等学校の外国語（英語）科教員39人を対象に調査を行った。

「書くこと」の言語活動を実施している時間は、言語活動全体の時間に対し、平均して34.6%であった。科目別では、英語コミュニケーションでは、27.4%、論理・表現では、41.4%であった。

「書くこと」の指導における課題（複数回答可）では、回答が多い順に、文法の指導（69.2%）、構成の指導（61.5%）、語彙の指導（51.3%）、成果物の評価（48.7%）、書く内容の指導（46.2%）、生徒への個別指導（43.6%）であった。文法、構成、語彙及び書く内容の指導は、個別指導にも求められる内容であるため、生徒への個別指導及び成果物の評価が課題であると考えた。

「書くこと」の指導における生成AIの活用状況について、4件法で質問したところ、「あまり活用していない。」又は「活用していない。」という回答が56.4%を占め、その理由は、「活用の方法が分からない。」（54.5%）が最多であった。また、「書くこと」の指導で生成AIを活用したい場面（複数回答可）について、回答が多い順に、添削（76.9%）、教材作成（64.1%）、採点（51.3%）、生徒への個別指導（48.7%）であった。研究主題及び研究仮説との関連を踏まえ、本研究では、添削、採点及び生徒への個別指導に焦点を当てることとした。

## 3 開発研究

表1 学習モデル

### (1) 生成AIを活用した「書くこと」の学習モデル

本研究における生成AIを活用した「書くこと」の学習モデル（以下「学習モデル」という。）では、生徒が主題に基づき、自らの考えとその理由を英語で書き、その後、生成AIを活用して、推こうを繰り返し、完成版として提出する（表1）。全過程を通して、生徒の一人1台端末及び学習支援システム等を活用し、ペーパーレスでの学習活動を実現する。

順序	学習内容
1	主題についての英作文作成
2	生成AI使用方法の確認
3	生成AIを活用した英作文の推こう

表2 振り返りシートの項目例

### (2) 振り返りシート

生徒が自らの学習を調整しながら、粘り強い取組を行うために、目標、学習過程及び学習成果等を記述するワークシート（以下「振り返りシート」という。）を作成した（表2）。後述の検証授業において

順序	振り返りシートの項目
1	単元名
2	単元の目標
3	この単元で頑張りたいこと
4	学習記録（成果や課題、方策等）
5	単元全体の振り返り

は、学習支援システム上の電子データに必要な事項を入力する形で使用した。

#### 4 検証授業（令和7年10月から11月までの間に実施）

##### (1) 検証授業の概要

学習モデルの有効性を検証するために、全日制課程単位制総合学科の都立高等学校において、2年次生6学級、合計231人を対象に論理・表現Ⅱの授業で全3時間の検証授業を各学級で実施した。

生徒は、英作文課題1”Do you think the number of senior high school students who use computers for studying will increase in the future?”（将来、学習にコンピュータを使用する高校生の数は増加すると思うか。）を作成し、その後、生成AIを用いて、推考を行った。推考の途中でグループワークを行い、生徒間で英作文を読み合い、良い点や改善すべき点、生成AIの活用方法等について意見交換した。生徒が生成AIを活用して推考を行っている間、教員は、学習の進め方や英作文の内容、修正の方法等について、必要な生徒に対して個別指導を行った。

また、学習モデルに沿った学習を行った後に、生成AIを活用せずに英作文課題2”Do you think the number of senior high school students who use generative AI for studying will increase in the future?”（将来、学習に生成AIを使用する高校生の数は増加すると思うか。）を作成した。なお、検証授業で使用した生成AIは、都立学校生成AIサービス（都立AI）である。

##### (2) 検証授業における生徒の変容（n=184）

分析対象は、当日欠席者や回答不備を除いた184人とした。各項目における割合（％）は、少数第2位を四捨五入した値であり、合計が100％とならない場合がある。

##### ア 意識調査の結果

国立教育政策研究所「令和7年度全国学力・学習状況調査 生徒質問調査（中学校第3学年）」を参考に質問項目を作成し、検証授業前後に4件法で実施した。各表中の1は「当てはまる。」、2は「どちらかといえば、当てはまる。」、3は「どちらかといえば、当てはまらない。」、4は「当てはまらない。」を意味する。

(ア) 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。

	1	2	3	4
授業前	18.0%	56.5%	23.4%	2.2%
授業後	40.2%	51.1%	7.6%	1.1%

(イ) 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を次の学習につなげている。

	1	2	3	4
授業前	12.0%	47.8%	32.6%	7.6%
授業後	27.7%	56.0%	13.6%	2.7%

(ウ) 自分のペースで理解しながら学習を進めている。

	1	2	3	4
授業前	19.0%	42.4%	28.3%	10.3%
授業後	59.8%	30.4%	8.2%	1.6%

(エ) 分からないことがあったときに、すぐ調べている。

	1	2	3	4
授業前	41.3%	42.4%	13.0%	3.3%
授業後	71.7%	25.0%	3.3%	0.0%

(オ) 楽しみながら学習している。

	1	2	3	4
授業前	28.3%	42.9%	21.7%	7.1%
授業後	47.3%	42.4%	8.7%	1.6%

授業後は、全ての質問において、肯定的回答（「当てはまる。」又は「どちらかといえば、当てはまる。」）の割合が増加した。

#### イ 振り返りシートにおける記述

本シートは、学習活動における成果や課題、方策を記入する構成となっており、分析対象である184人全員が必要事項を記入し、学習に活用した。以下は、生徒の記述を抜粋し、表記を修正したものである。

(ア) 今まで、自分で英文を考えて書くことは得意ではなかったが、都立A Iを用いた授業を通して、少しは英文を自分で考えることができ、今まで諦めていたことも、自分でやってみようと自信がついた。

(イ) A Iがとても便利だということに改めて気が付いた。今後より進化していき、便利になると思うが、頼りすぎないようにしたい。

(ウ) 今回の学習を通して、A Iはとても気軽に、いつでも質問できる学習ツールだと感じた。まだまだ英語は苦手だが、今後もA Iを活用して少しでも楽しく学習していきたい。

(エ) うまくA Iを使えるか不安だったが、楽しく簡単に勉強できた。

(オ) A Iを利用して自分の意見を書くことは、楽しかった。

(カ) A Iに完全に頼ってしまうと自分の意見や考える力がなくなってしまうから、うまく関わるのが良いと思った。

(キ) 今後はA Iにあまり頼らずに自分の力で分かりやすく正確に文を作れるようにして、A Iはここぞというときに使うようにしていきたい。

#### ウ 英作文課題1 推こう前後の比較

以下は、生徒が独力で作成した英作文課題1（以下「推こう前」という。）と生成A Iを活用して推こうを行った後の英作文課題1（以下「推こう後」という。）の比較結果である。推こう後は、全ての項目で改善が見られた。

(ア) 語彙や文法の誤りがあるか。

推こう前 ほぼない 10.3% 少しある 38.0% その他 51.6%

推こう後 ほぼない 87.0% 少しある 13.0% その他 0.0%

(イ) 主題に対する考えがあるか。

推こう前 ある 90.2% ない 9.8%

推こう後 ある 97.8% ない 2.2%

(ウ) 考えに対する理由1があるか。

推こう前 具体的な理由がある 7.6% ある 71.7% ない 20.7%

推こう後 具体的な理由がある 58.2% ある 40.8% ない 1.1%

(エ) 考えに対する理由2があるか。

推こう前 具体的な理由がある 6.5% ある 57.1% ない 36.4%

推こう後 具体的な理由がある 63.6% ある 34.8% ない 1.6%

(オ) 理解しやすい英文であるか。

推こう前 ある 80.4% ない 19.6%

推こう後 ある 100.0% ない 0.0%

(カ) 英文が論理的であるか。

推こう前 ある 53.3% ない 46.7%

推こう後 ある 98.4% ない 1.6%

上述のうち、(イ)「ある」、(ウ)「具体的な理由がある」又は「ある」、及び(エ)「具体的な理由がある」又は「ある」に該当する生徒の割合は、62.5%から 97.3%に増加した。

## エ 生徒の変容

(ア) 生徒A

英作文課題1 推こう前

I think high school students are going to use computers more in the future. I have two reasons. Farst, my school use to computers always. Second, computers are useful so students can research questions they can't understand.

英作文課題1 推こう後

I believe that senior high school students will use computers more for studying in the future. There are two reasons for this. First, students at my school often use computers during classes. Second, computers are helpful because they let students look up answers to questions, they don't understand. For example, many online learning tools make studying more effective and engaging.

振り返りシートの記述

- ・ あまりうまく英語に変換できなかった語句や文章を、A I を活用して書くことができた。
- ・ ある程度書くことを決めて、自分で簡単な英文を書き、それをA I に打ち込んで直すところや付け足したほうが良いところを確認した。

- ・ 最初から全てA Iに聞くのではなく、分からないところだけを聞くようにした。

意識調査で向上した項目

- ・ 自分のペースで理解しながら学習を進めている。
- ・ 分からないことがあったときに、すぐ調べている。
- ・ 楽しみながら学習している。

#### (1) 生徒B

英作文課題1 推こう前

I think the number of senior high school students who use computers for studying will increase in the future. Because two reasons. First, computer is very nice. Second, we do not know topic study.

英作文課題1 推こう後

I think the number of senior high school students who use computers for studying will increase in the future. There are two reasons for this. First, computers are very useful because they help us find information quickly and easily. Second, we can look up topics we do not know and learn new things by using computers.

振り返りシートの記述

- ・ 何度も推こうを繰り返した。
- ・ A Iを活用して不自然な箇所を減少させた。
- ・ A Iを利用して自分の意見を書くことは楽しかった。
- ・ 自分の力だけで英文を書けるようになりたい。

意識調査で向上した項目

- ・ 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。
- ・ 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を次の学習につなげている。
- ・ 自分のペースで理解しながら学習を進めている。
- ・ 楽しみながら学習している。

推こう後の英作文は、推こう前と比べ、語数が増加し、語彙や文法の誤りがほぼなく、考え及びその理由が2点記されており、理解しやすく、論理的である。生徒Aは2点目の理由が、生徒Bは理由が2点とも具体的である。両生徒は、振り返りシートに学習状況等を具体的に記述しており、意識調査においても多くの項目で向上が見られた。

#### オ 英作文課題1・2の比較

検証授業の冒頭に生徒が独力で作成した英作文課題1と、類似の主題について生徒が独力で作成した英作文課題2を比較した。平均語数が39.3語から45.6語に増加し、語彙や文法の誤りが「ほぼない」又は「少しある」生徒の割合は、48.4%から65.8%に増加した。また、主題に対する考え及びその理由2点を書いた生徒の割合は、62.5%から70.1%に増加した。そして、論理的な英作文を作成した生徒の割合は、53.3%から71.7%に増加した。

#### 第4 研究の成果

意識調査の結果、振り返りシートの記述及び検証授業における生徒の学習状況から、生成AIを活用した「書くこと」の学習モデルに沿った学習活動を通して、生徒は、主体的に学習の調整を行い、読み手に伝わるように自らの考えを論理性に注意して書いて表現しようとする意欲を高めることができたと考える。

また、英作文課題1と2の比較から、生成AIを活用した「書くこと」の学習モデルに沿った学習活動により、生徒の英語を書く力が向上する可能性が示唆された。

#### 第5 今後の課題

生成AIの使用について、プロンプトの作成や操作への習熟が学習差につながることや過度な使用を防ぐために、学校や生徒の実態に応じて、使用するプロンプトや活用方法に制限を設けることを検討する必要がある。

また、教員や語学指導等を行う外国青年招致事業（JET）等によるネイティブの指導者、生成AIの役割を整理し、生徒が自ら考え、学習を進めていくことができるように指導を行う必要がある。